

# 意味論研究における Ernst Leisi の意義について

山 取 清

スイスの英語学者 エルンスト・ライズィの名は、1953年に刊行された『語内容、ドイツ語と英語におけるその構造』<sup>1</sup>の翻訳によって日本でもかなり広く知られている。この著は、その標題が示す通り、独英両語の比較対照を通して、その構造上の差違を内容面から説明し、それを実際の外国語教育にまで応用しようとした意欲的な試みである。刊行直後、彼の方法論と成果は、ウルマン (Stephen Ullmann) やヴァイスゲルバー (Leo Weisgerber) をはじめとする研究者によって積極的な評価を受けたが、初版刊行後四半世紀以上を経た今日でも、意味論研究史に残る優れた業績としての価値は少しも損なわれていない。そこで本論の目的は、諸研究者の見解を手掛かりに彼の理論を深層から捉え直し、そのもつ意義について考察することである。

## 1

『語内容、…』は四章から構成されており、その第一章が方法論にあてられている。ライズィの立場は、主に意味の史的研究を中心としたそれ以前の意味論と異なり、共時的研究に重点が置かれていると同時に、心理主義を排して社会学的観点からの考察を標榜している。彼は先ず冒頭で幼児の言語修得に対する一般的基準を例に挙げて、そこから言語使用のあらゆる

る段階における語の重要性を説く。したがってここで彼が目指しているのは、新しい観点からの語の分類法であり、彼はそれを言語行為の定義で始める。

彼は、実際の言語行為は「行為の型」(Akttypus)の実現であるという見方から、すべての言語行為を一種の「慣習」(Brauch)とみなし、これを次のように公式化して述べている。

「1. 話者は、言語行為を行なう際に完全に自由なのではなく、ある種の社会的規定に従わなければならない。つまり、話者は、任意の行為を行なってよいのではなく、彼の言語の行為の型を実現するような行為のみを行なうことができ、しかも、その際に一定の条件がそろっていなければならない。

2. もし話者がこれらの規則を守らない時には(うそなど)、場合によっては社会的制裁を受けたり、あるいは誤解されたり、すなわち、自己の目的を果たせなかったりする。

3. 語の使用を許す条件は、言語外にあることもあるし、当該の語行為に先行する言語行為そのものにある場合もある。

4. ある条件の下ではある特定の行為が必ず行なわれなければならないということは決してない。例えば、„Ich habe kein Auto gesehen.“ という替わりに、„Damals ist kein Auto vorbeigekommen.“ ということもできる。これは些細なことのようなのであるが、これこそ言語の社会的強制の重要な点を明確にするものである。つまり、その強制は必然的に„命令“ではなく„禁止“なのである。したがって、ある種の条件の下では、ある行為が行なわれなければならないのではなく、ある行為が許されて、他の行為が禁じられるのである。

5. 言語行為は多くの場合目新しく個人的であるが、これは慣習、すなわち、個々の語から構成されている。したがって正しい発話では、孤立した語を口に出すのではない時には、一つの慣習ではなく、一連の慣習を常

に行なっているのである。

6. あらゆる言語行為は必然的に二重に条件づけられている。つまり、言語外のおよび言語内的条件である。したがってこれは、数学的に述べれば、少なくとも二つの変数をもつ関数である。<sup>2</sup>

ライズィはここで言語を記述するのに三つの観点に留意している。すなわち、繰り返される「行為の型」、その実行を許容ないし要求する「条件」そしてそれらの行為が行なわれる「共同社会」である。

また、「名指し行為」(Benennungsakt)を語の音声形態とある一定の「条件」との間にある緊密な関係を解明する手掛かりと考える彼は、幼児が語の用い方を修得していく過程からこれを解釈している<sup>3</sup>。それによると、子供は通常少なくとも生後一年半ぐらいまでは一語文、すなわち、孤立した語をしゃべるものであるが、この場合、子供がそれらの語をどのような意図をもって使用するかよりも、むしろ大人が子供の語の使用法をどのような原則に基づいて矯正するかが問われなければならない。例えば、子供が „Ball!“ „Hund!“ といった語を態度で示しながら発する時、それは「名指し行為」であるが、それが正しい「名指し行為」として認められるためには、常に外的条件が同時に充たされていなければならない。そしてその行為が正しい時には、何らかのかたちで承認され、誤っている場合には直されるという具合に、だんだんと経験を重ねていくうちに子供は「条件型」(Bedingungstypus)を学習していくのである。それ故、ある語の音声形態は、ある一定の「条件」が充たされている時にのみ発音することが許されることになる。そこで彼は、この時の語行為あるいは音声形態を「語形」(Wortform)、名指しの時に語行為の実行を許す「条件」を「語内容」(Wortinhalt)、そして指示方向にある対象を「指示対象」(das Bezeichnete)と定義する。

したがってライズィの定義によれば、語を正しく使用できるということと、すなわち、「語内容」を正しく理解しているということは、結局、そ

の語の使用を規定している「条件」に精通していることになるのであるが、しかし、実際には、これは決して語の使用者がすべて個々の条件を意識しており、それらを列挙できるということを意味しているわけではない。彼はこれを三角形を例に挙げて説明している<sup>4</sup>。「これは三角形である」(Das ist ein Dreieck.)と言う時と、「これは三辺の直線よりなる図形である」(Das ist eine dreiseitige gradlinige Figur.)と言う時とでは、明らかに観点の相違が感じられる。つまり、前者では事物が「偶有性」(Akzidens)を持たない実体、すなわち、三角形という類の代表として叙述されており、個々の性質については何も述べられていないが、後者では事物が二つの個的な特徴を持つ実体として把握されている。要するに、分ち難い「条件」の複合体からなる個々の語の「語内容」には、「指示対象」を偶有性のないものそれ自体の顕在化として叙述しようとする傾向があり、いかなる種類の現象も、それが一語で叙述される限り、「実体化」(Hypostasierung)の影響で他の現象から切り離されて独立した存在へ高められるもので、人間の見方は普通この傾向に従属していると考えられる。

さて、この「指示対象」の叙述に関する章に引き続いて、「動詞と名詞に対する静的および動的条件」について一章が設けられている。ライズィはここで「意味論的一致」(die semantische Kongruenz)と「間接隠喩」(die indirekte Metapher)についても述べており<sup>5</sup>、これらは前章で行なわれた三品詞の意味論的範疇への分類と、大部分の動詞がただ運動の性質によって条件づけられているだけでなく、行為の主体や対象の状態によっても条件づけられているという認識を前提に導き出された原理である。つまり、名詞はある対象に用いられた時にその対象を分類する。そしてたいの動詞も運動を分類するばかりでなく、動く物体も分類する。したがってある名詞と動詞が同じ対象に用いられる場合には、この双方の分類が互いに矛盾してはならず、Aのように同一であるか、Bのように動

詞の分類するクラスが名詞のそれよりも広くなければならない。

A. Die Flüssigkeit fließt.

B. Das Wasser fließt.

この例では、主語名詞と述語動詞の間に見られる対応関係が示されているが、この「意味論的一致」は、述語動詞と目的語の間にも成り立つ。そして、この原理に基づいて「直接隠喩」(die direkte Metapher)と「間接隠喩」を定義できる。

C. Die Steine reden.

D. Die Steine schweigen.

ライズィの説明によるとCの文の動詞 *reden* によって表わされる行為とは、ある言語の「型」を具体化するような音声を発することである。しかし、この文の主語 *Steine* がこの種の音声を発することは現実には不可能である。したがってここでは主語名詞と述語動詞の分類するクラスが互いに食い違っているために「意味論的一致」が守られておらず、しかも現実にも合致していない。そこで、これは「直接隠喩」と呼ばれる。一方、Dの文では、述語動詞 *schweigen* の「語内容」は、いかなる発話行為もないことであり、それ故、この動詞は、ある行為のないことを条件とする一種の「欠除詞」(Privativa)に属する。そして主語 *Steine* はもちろん発話行為を行なうことができない。したがって純粹に行為という点から見れば、*Steine* は *schweigen* の「使用条件」を備えていることになり、現実にも合致している。しかし、述語動詞 *schweigen* は、それが表わす運動によってのみ条件づけられているのではなく、行為の主体によってもその使用が条件づけられているために、すなわち、述語動詞 *schweigen* は、主体を発話行為の可能なものとして分類しているので、ここでも「意味論的一致」が破られている。そこでライズィは、これを性質上「間接隠喩」と呼ぶのである。

ライズィのように、言語を社会現象として捉えようとする考え方からは、その根底において明らかに イェスペルセン (Otto Jespersen)<sup>6</sup> や ソシュール (Ferdinand de Saussure)<sup>7</sup> の理論的影響が看取できる。とくに、言語行為を言語共同社会にある「型」の実現とみなし、ある「型」と他の「型」が「差違」によって区別されるとする彼の定義は、各言語単位の価値が「差違」によって決定していると述べたソシュールの見解をまさしく踏襲しているのであろう。ただし、ソシュールにとって、言語記号は、「記号意味部」(signifié) と「記号作用部」(signifiant) という用語で示される「概念」(concept) と「聴覚映像」(image acoustique) とが表裏一体となったものであり、あくまで心理的実体として把握されているのに対して、「語内容」を「使用条件」とするライズィの定義は、冒頭で彼自身が述べている通り、この点で幾分行動主義的な色合いが感じられる。いずれにせよ、ライズィが『語内容、…』を出版した50年代は、ソシュールの説に端を発し、その後様々な地域で分派した構造言語学の中で、いわゆる意味の構造的分析の研究がいろんなかたちで行なわれ始めた時期であるが、この頃の状況についてはウルマンが詳しく報告しており、彼はその中でライズィの研究についても、初めて意味論の総合的な展望から位置づけを行なっている。

そこでウルマンは意味定義の方法論に二つの方向、すなわち、「操作的理論」(operational theory) と、「指示的理論」(referencial theory) あるいは「分析的理論」(analytical theory) を区別して、次のように説明している。

「現在、大雑把に言えば、意味の性質に係わる考え方には二つの主な学派がある。つまり、ヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) に

よって提示された操作的解決法と、オグデン/リチャーズ (C. K. Ogden/I. A. Richards) の三角形がその古典である意味を構成分子に分解しようとする分析的解決法である。……二つの方法論、あるいはむしろ調査の二つの面の関係は、結局、言語 (language) と発話 (speech) との関係と同じものである。つまり、操作的理論は発話における意味と、そして指示的理論は言語における意味と関係するのである。」<sup>8</sup>

そして「語内容」を「使用条件」と定義するライズィの方法については、評価するのが難かしいとしながらも、「この考え方は、ヴィトゲンシュタインの意味の概念に極めて類似しているように思われる。」<sup>9</sup>と述べて、これを「操作的理論」の一つと見ているようである。だがこの見解は一面では的を得ているが、ライズィの方法論を完全に評価しているとは認め難いだろう。つまり、語の真の意味を、人がそれについてなすところを観察することによって得ようという「操作主義」は、確かにライズィの定義との共通性を有してはいるが、ライズィの場合には、言語行為が個人的な観点からではなく、共同社会の慣習に基づいて定義されているために、パロールではなくラングにおける意味がまず第一に求められているからである。

一方、「言語内容研究」(Sprachinhaltsforschung) の立場から最も早くライズィの研究に着目したのはヴァイスゲルバーである。彼の場合には、『語内容、…』が出版された翌年にはいち早くこれを取り挙げて詳しく意見を述べている。

「ライズィの成果は我々にはいくつかの理由から重要である。第一に、それらは多くの実例によって客観的な立場から従来あまり確かめられていなかった観察を豊かにしてくれたことである。語と存在の関係は一面では „自明のもの“ であるが、他面では言語学では認められない程非常に多様である。ライズィがその素材を調べ上げている観点は批判もされるかもしれないが、いずれにせよ、様々な分類によってそれ自体既に有益で拡張可

能な観察整理の手掛かりである。』<sup>10</sup>

彼はこのようにライズィの研究の意義を率直に認めたくえて、更に次のような見解を述べている。

「だが次には、これらの観点は、その問題提起の自明性にもかかわらず、内的な首尾一貫性によってここで我々にとって決定的な箇所へと導いてくれる。つまり、„語の適用性の条件“ (Bedingungen der Anwendbarkeit der Wörter) を問えば、社会的通用 (soziale Geltung) の認識によって規範的基準と観点の問題に出会うことになる。諸成果の文法的確認で始めて、更に継続して、適用された処置の言語学的洞察へと歩んでいくのと同じように、我々はまさしく言語の世界解明 (sprachliche Welterschließung) がここに被いを取られているのを見ているのである。ライズィ自身はまさしくこれら二つの観点を考慮しようとしており、エネルギー的なものを少し強調すれば、彼の言う „通用の条件“ は思考上すぐには (我々の言う) „措定法“ (Verfahrensweise der Setzung) に結びつけることができる。……そして我々は実体化という考えを意味に即して継承することによって、存在に対する言語の把握 (Zugriff) が、人間生活の社会形式と結びついた、人間が存在を意識化するために欠かせない条件であることが、ますます明瞭に理解できるようになるだろう。』<sup>11</sup>

これらの指摘からは明らかにヴァイスゲルバーがライズィの理論と自説との共通性について認めようとしていることが窺える。つまり、現在ではヴァイスゲルバーは言語研究を四段階に分け、とくに動的あるいはエネルギー的な段階を「機能中心」(leistungbezogen) および「作用中心」(wirkungbezogen) の観察に二分しているが、当時ではまだこの区別は明確にはなされていなかった。しかし、上掲の箇所からも明らかなように、既にこの時期にはその方向がはっきりと感じられる。そしてその点と関連して、彼がここで「実体化」と「把握」を同一の範疇に入れていること、あるいは後に「作用中心の観察」で国語の精神面が言語共同社会の構

成員に及ぼす拘束力について論じているように<sup>12</sup>、ライズィが言語的強制の特質をある条件下における「禁止」ないし「許容」としているのを、「社会的通用」の概念の下に捉えようとしていることも、それらの延長線上に位置していると言えよう。そしてこれらの点を合わせて判断するならば、ライズィの見解が、その後のヴァイスゲルバーの理論形成の上で一つの役割を果たしているようにも思われるのである。

また、ヴァイスゲルバーと同じ「言語内容研究」の側からライズィの研究を論評しているのはシュヴァルツ (Hans Schwarz) である。

「簡潔ではあるが、非常に内容豊かなこの小冊子は、とくに意味論への入門書として適しており、内容中心の語誌として信頼できる下地である。簡潔に制限されたこの本は、個々の語の内容構造を対象として説明し、ここで更に、考察される素材の領域をいわゆる具体詞でかつ単純詞に限定してはいるが、その成果は最初からもっぱら孤立した語ではなく、言語中間世界の概念結合の分節としての役割にねらいがしぼられているために、言語内容の全領域に対して広範囲な妥当性を示している。……現在でも尚、範として有効な、使用条件と意味論的一致、すなわち、既に一種の野の理論から直接素材を考察していく言語手段の結合価 (Wertigkeit) に基づいて、内容指標をその本質から解明していることから見れば、使用された分類に時おり見られる欠点はさほど重要ではない。多種多様で、興味に富み、そして啓発的なライズィの観察の中から個々のものを強調するのは難かしい。それでも、動作態様、間接隠喩、複合的語内容の章には、言語内容研究の注目が高まるのが当然かもしれない。」<sup>13</sup>

このようにシュヴァルツは全体としてヴァイスゲルバーと同様に「言語内容研究」に対するその価値を認め、一方個々の問題についても興味ある指摘を行なっていることがわかる。つまり彼は、ここで「意味論的一致」を「野の理論」(Feldtheorie) および「結合価」との関連から見ているのである。

「意味論的一致」の原理に類した考え方は、意味論研究の歴史を振り返ってみると、もちろん多少の差違はあるが、他の研究者からも独自に進められていたことがわかる。中でもポルツィヒ (Walter Porzig) が行なったそれは、ライズィの言う「意味論的一致」に最も近い観点から出発したものであろう。つまり、ポルツィヒは *wesenhafte Bedeutungsbeziehungen* (本質的意味関係) としてこれを取り挙げているのである<sup>14</sup>。彼がこの論文を発表したのは1934年のことであるが、この中で彼は同じ原理を示すのに *wesenhafte Bedeutungsbeziehungen* と共に、*elementare Bedeutungsfelder* (基本的な意味の野) という用語を並用していることから判断して、おそらく、その6年前にトリーア (Jost Trier) がマールブルク大学へ教授資格請求論文として提出していた『知性の意味領域におけるドイツ語の語彙、言語の野の歴史』<sup>15</sup> の中で公表され、注目を浴びた「語野理論」(Wortfeldtheorie) をある程度意識して執筆したものと思われる。ライズィは「意味論的一致」の原理を、述語動詞と主語名詞の分類するクラスが互いに一致するか、もしくは前者が後者より広くなくてはならないと定義しているが、ポルツィヒは *wesenhafte Bedeutungsbeziehungen* について次のように説明している。

「gehen が Füße を前提にしているように、greifen は Hand を、sehen は Auge を、hören は Ohr を、lecken は Zunge を、küssen は Lippen を前提にしている。ここで重要なのは、明らかにシュペルバー (Hans Sperber) の意味での単なる連合 (consociation) ではない。したがってある一つの語には別の語がよく思いつかれるのだというのではなく、そこにいわれている意味自体の本質の中に基づく関係なのである。」<sup>16</sup>

しかもポルツィヒがこの関係をライズィの場合と同じように、「隠喩法」

(Metaphorik) の解釈にも適用していることは、また興味ある事実であろう。

「したがって、隠喩は二つの意味の野の分節が結合して意味深長な主張となったものである。それは意味の野の存在を前提にしており、これらの野を強く結びつける力がそれに必要な緊張を提供し、結果的に文体的な効果を生むのである。」<sup>17</sup>

ポルツィヒの定義はライズィに比べて少し簡単にすまされてはいるものの、それでも両者がほとんど同じ考え方から出ていることは確かだろう。ポルツィヒはその後、1950年に初版を刊行して以来言語学の入門書として好評を得たあの『言語の驚異』<sup>18</sup>においても再度これに言及している。だがそこではトリエアが指摘した「語野」については、それがとくに「野」の内部で互いに限定し合っている隣接する諸単位が形成する分節構造を表わしていることから、これを *parataktisches Feld* (並列的な野) と命名し、彼自身が従来 *wesenhafte Bedeutungsbeziehungen* と呼んでいた関係に対しては、これがとくに話線の構成に重要であるという理由で *syntaktisches Feld* (シンタクスの野) という用語を提案している。しかしながら、そもそも後者に対してもこのように「野」の概念を持ち出すべきかどうかという問題については、意見が割れるところである。これについては、当初トリエアがそうであったように<sup>19</sup>、最近でも ホーベルク (Rudolf Hoberg)<sup>20</sup> やゲッケラー (Horst Geckeler)<sup>21</sup> のように否定的な意見の方が優位を占めているが、先程のシュヴァルツは、この点でややポルツィヒに近い見解を示している<sup>22</sup>。

トリエアの高弟にあたるシュヴァルツにとって、「野の理論」の補完が重要なテーマの一つであることは言うまでもないが、「野」そのものに関する考え方にもトリエアのそれとの差が認められる。もちろん彼にとっても「野の理論」が「言語内容」を究明していくうえで最も重要な手段であることに変わりはない。しかし、トリエアの言う「野」が主に「語野」を

指しているのに対して、シュヴァルツの場合には、それは「言語内容」そのものに内在して様々な分節構造を成立させるいくつかの要因（シュヴァルツはこれらを *Leitmerkmale der Felder* と呼んでいる）を包括する共通の上位概念として用いられている。つまりトリーアが示した「野」は、感情概念や色彩等のように、ある特定の種属名詞によってその概念領域が区切られている場合が多く、しかもそれを構成する諸単位の分析は原則的に研究者自身の能力に任されているが、彼はこの点について批判的意見のようである。

「ある言語手段の完全な意味は、いわゆる文の脈絡ばかりでなく、その概念的環境 (*begriffliche Umgebung*) によっても共に決定されるものであるが、その時にも必ずしも実際には表出されていない概念的背景 (*Begriffshintergrund*) 全てがそれに関与しているのではない。つまり、連想される野の構成要素は個々の事例に応じて異っており、野全体を把握するためには、文献学的処置 (*philologisches Verfahren*) を繰り返していくうちに浮かんでくる様々な一致や相違が重要なのである。」<sup>23</sup>

つまり、シュヴァルツにとって「野」とは、既存の概念領域によって最初から明確に区切られているのではなく、この文献学的処置によって初めてその中心や周辺、あるいは重なりが次第に明瞭になってくるものなのである。そして彼はそれらの *Leitmerkmale* を示す用語として、とくにそこにある種の結合力が内在していることを明確にするために、一方を *Begriffsklammer* (概念のかすがい)、そしてもう一方に対しては、それが文における述語動詞と主語あるいは目的語の間に見られるある特定の意味関係を成立させているものであることから、*Prädikativklammer* (述語のかすがい) という名称を採用しており<sup>24</sup>、後者については次のように説明している。

「たいていの場合、ある動詞が、可能な主語あるいはそれに添えられる様々な状況規定語に対して発展させる野を形成させる力は、(ポルツィヒ

が考えているよりも) もっとわずかなものであり、その他の言語手段の結合価の領域 (Wertigkeitsbereich) における緊張はなおさら低いものである。それでも、Prädikativklammer には、野の研究の非常に重要な Leitmerkmal の役割が与えられる。なぜなら、それは内容と結合した言語慣用の集積として言語の野の構成と存立に重要な役目を果し、まさしく文献学的方法によってこの言語の野に接近する道を開いてくれるからである。いずれにせよ、ここでも様々な Prädikativklammer の相互作用に注意し、いくつかの結合価の領域の重なりを探る時に初めて有益な結果にたどり着くことができる。」<sup>25</sup>

シュヴェルツはここでも「結合価」に言及しているが、周知のように、これはフランスのテニエール (Lucien Tesnière)<sup>26</sup> によって初めて言語学の分野に取り入れられた「ヴァレンツ」(Valenz) の概念を、ドイツ語学に導入したもので、「結合価」とは、ある言語手段がその内容に基づいて他の言語手段と文法的(とくに syntagmatisch な)結合を成立させる能力を指している。そしてここでシュヴェルツが述べている見解に従えば、このように他の言語手段と同一の「結合価の関係」(Wertigkeitsbeziehung)にある言語手段は共に「結合価の領域」を形成し、それらの一致や相違を調査することによって「野」の構造を帰納的に推論できる。したがって、ここにおいて、ライズィやポルツィヒによって指摘された原理と、「ヴァレンツ」をはじめとする近年のシンタックス研究をめぐる問題領域との関連が浮かんでくる。

#### 4

まずドイツにおける最も代表的な文法書としてドゥーデン文法の場合を概観してみることにしよう。ドゥーデン文法では1957年から58年にかけてグレーベ (Paul Grebe) を中心とするマンハイムの編集部が新版の作成

に着手した際に、とくにその第二部でドイツ語の文構造の新たな分類が試みられた<sup>27</sup>。そして主に ヴァイスゲルバー や グリンツ (Hans Glinz) が用いていた Abstrichmethode (削除操作) を導入し、それによってドイツ語の syntaktische Grundformen が設定されたのであるが、その時にとりわけ重要な問題として生じたのが、一定の動詞に必ず現われる sinnotwendige Ergänzung に関するものであった。ドゥーデン編集部では、その後もこの sinnotwendige Ergänzung を統計的に明らかにするために、ドイツ語の中で通用している語の連合的關係をできる限り収集していこうという努力 (例えば, Sonne と scheinen,あるいは Hund と bellen 等の関係を多くのカードに記録収集する) が継続され、これらすべてに対する共通の用語として、グレーベは Sinnkopplungen (意義結合) を採用した。更に、このようにして得られた Sinnkopplungen を細かく調査して次のような事実に気づいた。すなわち, Sinnkopplungen を構成している語の広がりを見ると、一つあるいはわずかの Sinnkopplungen でしか現われない語 (例えば, 動詞 röhren は „Der Betrunkenere röhrt durch die Straße.“ のように特別に転用された例を除くと, Hirsch としか結びつかない) と, そうでない語 (例えば, 名詞 Auge は funkeln, leuchten, flackern, glänzen, brennen, schließen, verbinden, wandern lassen, auf jmdn. oder etwas richten, auf jmdn. oder etwas ruhen lassen, etwas im Auge behalten 等その他多くの結合が可能である) とが存在するのがわかる。そこでグレーベが、ある語に可能なすべての Sinnkopplungen の集合を月の暈に例えて semantisch-syntaktischer Hof と名づけ、このような経過を顧みて、「ここにおいて、ポルツィヒやライズィによって指摘されていた言語単位が、語彙の構成ばかりでなく、シンタクスの領域に対しても重要であることが判明した」<sup>28</sup> と語っていることから推察できるように、ドゥーデン文法では、ドイツ語の文を syntaktische Grundformen として分類するとい

う作業過程において、sinnotwendige Ergänzung の問題に端を發して様々な統計学的調査を繰り返していくうちに、最初 Abstrichmethode を通じて得られたあの Grundformen が、計らずも、既にポルツィヒやライズィが指摘していたのと同じ原理に基づいているということを確認する結果になったのである。

一方、60年代の後半からドイツ文法でも非常に注目され始めた「ヴァレンツ理論」の場合、これは「依存関係文法」(Dependenzgrammatik) としてヘルビヒ (Gerhart Helbig) 等によって研究が進められてきたが、彼が初めてその理論に基づいて編集した辞書の序言で、これを作成するにあたって顧慮した手順を、動詞記述の三段階として大体次のように示している<sup>29</sup>。つまりヘルビヒの見解によると、原則として先ず第一に、actants (共演成分) の数の確認で始め、次に純粹に形式的な意味での、syntaktische Umgebungen (シンタクスの環境) を定め、そして最後の段階として semantische Umgebungen (意味論的環境) を考慮する。したがってこれはドゥーデン文法に見られた経過と極めてよく似ている。つまり、ある意味ではヘルビヒも外見上グレーベと同様に (そして本来の「ヴァレンツ理論」とは異なり)、最初の段階で形態面から出て、最後に内容面に向かうという過程を踏んでいると言えるが、それがポルツィヒやライズィの場合には逆の手順が示されていることは注目に値する結果であろう。

## 5

「現在、言語学では文構造を記述するのに二つの原理がせり合っている。つまり、依存 (Dependenz) と構成 (Konstituenz) である。依存分析は、文の諸要素の間には依存関係が成り立つという仮定から出ており、動詞を階層の頂点に位置づけている。それに対して構成構造分析は、

あるものがあるものに含まれているという関係を強調し、語 (Wörter)、文肢 (Satzglieder)、文 (Sätze) の間の階層的関係を記述する。依存分析は、動詞の内容的範疇から文のシンタクスの構造を (文型において) 把握し、究明する試みである。これに対して構成分析は、言語の形態面から出て、文のシンタクスの構造を、そしてそこから文の諸関係の意味論的機能 (主語、述語、目的語、付加語、副詞的規定語) を把握しようとする試みである。文をこのように分析する傾向は、根本的には古典的学校文法と西洋の伝統に由来する。」<sup>30</sup>

これは最近アイヒラー (Wolfgang Eichler) とビュンティング (Karl-Dieter Bunting) がある文法書で述べている見解であるが、ここでこの文を引用したのは、ライズィの業績の位置づけと係わっている本論に一つの結論を示すにあたって、これがそこにある種の示唆を与えてくれると思われるからである。既に本論では評価の手掛かりとして幾人かの研究者の見解に触れてきたが、今敢えてそれらを概観すると、そこには二つの論点が見つかる。すなわち、それらはライズィの用いた方法論とその成果、とくに「意味論的一致」をめぐる論議に要約することができる。しかしながら、更に一步考察を進めるならば、この一見異なる 出発点を持つ論議が実際には明らかに一つの線で結ばれていることがわかるのではないだろうか。つまりシンタクスと意味論の関係である。アイヒラーとビュンティングは現在のシンタクス研究に二つの方向を認めていることは先に述べたが、既にグリントもこれに関連した注目すべき指摘を行なっている。

「通用している内容の領域 (したがってその言語において現在拘束的に働いている概念) を私は Nomosphäre と呼ぶ、この領域に属する、したがって拘束的に働いている内容的現象のすべてを、私は nomosemantisch と呼ぶ。„Nomosphäre“ と „nomosemantisch“ な領域は、したがって互いに被い合っている。それに対して語形態の領域はそれと異なる。ここでは客観的連関のことを言う時には、Morphosphäre と呼ぶことにす

る。』<sup>31</sup>

既に述べたように、グリントは『ドイツ語の内的形式』においてドイツ語のシンタックス研究の分野に初めて構造的手法を導入した人であるが、その後彼はこの研究過程を通してある問題に遭遇した。つまり、彼はシンタックスにおける内容面と形態面の明確な区別の必要性を認識することになった。彼の指摘するところでは、従来のドイツ語研究でこの区別がはっきりと行なわれているのは、とくに共時的語形成論 (Wortbildungslehre) の分野であるが、シンタックス研究に目を転じた時、これは必ずしも徹底されていないという事が見出せる。そしてこの点についてはシュテツェル (Georg Stötzel) も、「ドイツの文法研究には、伝統文法あるいは通時論に基づく解釈を、構造的手法と調和させるか、もしくはそれらを交互に適用する傾向がある」<sup>32</sup> と述べているように、ドイツの文法研究、とりわけシンタックス研究においては、内容 (したがって Nomosphäre) を中心に考察を進めようとする「言語内容研究」の努力とはうらはらに、形態中心か、もしくはそれら両面がはっきりと区別されずに混同される傾向があり、内容面からの記述は従来必ずしも十分な成果を納めていないようである。だが、このような歴史的状況から判断する時、ライズィの業績は、たとえそれが完成されたかたちを提示したものではないにせよ、ヴァイスゲルバーがそこに「社会的通用」の認識への萌芽を認めていることから窺えるように、ポルツィヒの研究と並んで、ドイツ語学の分野においてまさしく内容面からシンタックスを考察する道を開拓した先駆的存在であることは間違いないだろう。そして事実そうであるならば、彼の研究のもつ本来の意義もおそらくは、「言語内容研究」への貢献と合わせて、この点についても認められるものと思われる。

注

- 1 Ernst Leisi, *Der Wortinhalt, Seine Struktur im Deutschen und Englischen*, Heidelberg 1953. 邦訳『意味と構造』鈴木孝夫訳 1960 研究社
- 2 Ibid., S. 16f.
- 3 Ibid., S. 18ff.
- 4 Ibid., S. 23ff.
- 5 Ibid., S. 68ff.  
尚, ライズィは「欠除詞」については次のように説明している (S. 47f.). 「正常なものないし期待されているものとの対立において, 何か欠けていることを条件とする語」, 更にこの種の動詞には 2つのクラスがあり, それは「指示される生物または事物が普通ないし期待されていたことに反して, そこにないことを条件とする動詞」(fehlen, mangeln 等) と, 「指示対象が元来行なう能力のある行為を指示の瞬間には行なっていないことを条件にする動詞」(ruhen, schweigen, warten, bleiben, streiken 等) に区別されている.
- 6 Otto Jespersen, *The Philosophy of Grammar*, London 1924.
- 7 Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, hg. von Charles Bally u. Albert Sechehaye, Paris 1949. 邦訳『一般言語学講義』小林英夫訳 1972年 岩波書店
- 8 Stephen Ullmann, *Semantics. An introduction to the science of meaning*, Oxford 1962, S. 67. 邦訳『言語と意味』池上嘉彦訳 1969年 大修館書店
- 9 Ullmann, *The Principle of Semantics*, 2. Aufl., Oxford 1959, S. 316.
- 10 Leo Weisgerber, *Die sprachliche Erschließung der Welt*, Düsseldorf 1954, S. 58.
- 11 Ibid., S. 59.
- 12 Weisgerber, *Die wirkungbezogene Sprachbetrachtung*. In: *Wirkendes Wort* 13. 1963, S. 246ff.
- 13 Hans Schwarz, *Bibliographisches Handbuch zur Sprachinhaltsforschung*, 17. Lfg. Köln 1967.
- 14 Walter Porzig, *Wesenhafte Bedeutungsbeziehungen*. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 58. 1934, S. 70-97.
- 15 Jost Trier, *Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes. Die Geschichte eines sprachlichen Feldes*, Bd. 1: Von den Anfängen bis zum Beginn des 13. Jahrhunderts, Heidelberg 1931.
- 16 Porzig, a. a. O., S. 70.
- 17 Ibid., S. 79.
- 18 Porzig, *Das Wunder der Sprache*, 4. Aufl., Bern 1967, S. 126.
- 19 Trier, *Deutsche Wortforschung*. In: *Germanische Philologie, Ergebnisse*

- u. Aufgaben, Festschrift für Otto Behaghel. 1934, S. 173-200. 邦訳『ドイツの意味研究』は『本質的意味関係』と共に『現代ドイツ意味理論の源流』所収 福本喜之助, 寺川央編訳 1975年 大修館書店
- 20 Rudolf Hoberg, *Die Lehre vom sprachlichen Feld. Sprache der Gegenwart 11*, Düsseldorf 1970.
- 21 Horst Geckeler, *Strukturelle Semantik und Wortfeldtheorie*, München 1971, S. 95.
- 22 H. Schwarz, *Leitmerkmale sprachlicher Felder*. In: Sprache- Schlüssel zur Welt, Festschrift für Leo Weisgerber, Düsseldorf 1959, S. 245-255.
- 23 Ibid., S. 250.
- 24 Ibid., S. 251.
- 25 Ibid., S. 252.
- 26 Lucien Tesnière, *Éléments de syntax structurale*, Paris 1953. dazu vgl. Georg Stötzel, *Ausdrucksseite und Inhaltsseite*, München 1970, S. 82ff.
- 27 Paul Grebe, *Der semantisch-syntaktische Hof unserer Wörter*. In: Satz u. Wort im heutigen Deutschen, Düsseldorf 1967, S. 109-114.
- 28 Ibid., S. 110. グレーベはその後 Satzbaupläne の特定の paradigmatische Wortreihen 及び Präpositionen と関係する能力を指す semantische Valenz を認めているようである. dazu vgl. *Dank an Leo Weisgerber und Walter Porzig*. In: Wirkendes Wort 1979, 3. jg. S. 180-183.
- 29 Gerhard Helbig/ Wolfgang Schenkel, *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*, Leipzig 1969.
- 30 Wolfgang Klein / Karl-Dieter Bünning, *Deutsche Grammatik. Form, Leistung und Gebrauch der Gegenwartssprache*, Tronberg 2. Aufl., 1978, S. 81.
- 31 Hans Glinz, *Deutsche Syntax*, Stuttgart 1965, S. 13.
- 32 Stötzel, a. a. O., S. 150.

# Ernst Leisi — In bezug auf seine Bedeutung in der semantischen Forschung —

Kiyoshi Yamadori

Der Schweizer Anglist Ernst Leisi ist durch die Übersetzung seines ersten 1953 veröffentlichten Werkes: „Der Wortinhalt, Seine Struktur im Deutschen und Englischen“ auch in Japan verhältnismäßig weit bekannt. Dieses Buch zielt darauf, die Ergebnisse zugleich praktisch und theoretisch in Anwendung zu bringen, indem es zum richtigen Gebrauch einer großen Zahl schwieriger englischer Wörter verhelfen, und auf Grund des Unterschiedes zwischen deutschen und englischen Wörtern zu einer neuartigen Analyse und Einteilung der Wörter überhaupt führen will. Aus dem hier entwickelten Forschungsverfahren kann man verschiedene Elemente herausspüren, weil er seine sprachtheoretischen Grundbegriffe sowohl von englisch-amerikanischen wie auch von vielen Forschern des europäischen Festlands bezieht. Aber sie führen in schönster Harmonie zu einer eigenen, in sich abgeschlossenen Auffassung, die auch für spätere Arbeiten eine methodische Grundlage liefert.

Unter den hier gewonnenen Ergebnissen kann man vor allem die Definition der Wortinhalte auf Grund des Brauchs (gesellschaftlicher Normen) und das dadurch vermittelte Prinzip der semantischen Kongruenz als das wichtigste ansehen. Nach dem Erscheinen dieses Buches nimmt L. Weisgerber es auf, und sagt, daß Leisi vieles mit seiner Auffassung gemein habe, und von demgleichen Gesichtspunkt weist H. Schwarz auch darauf hin, daß Leisi einen aufschlußreichen Beitrag zur Sprachinhalts-

forschung leiste, und seine semantische Kongruenz im Zusammenhang mit dem Feld- oder Wertigkeitsgedanken stehe. So finden wir ihn nicht nur auf das Gebiet der Wortlehre, sondern auch das der Syntax eingehen. Wenn wir daher von diesen Aspekten die allgemeine Tendenz der deutschen Grammatikforschung betrachten, die Nomo- und die Morphosphäre im Sinne von H. Glinz nicht sauber zu trennen, so ist es möglich zu sagen, daß Leisi damit wohl eine bahnbrechende Arbeit, die Sprache rein von der Inhaltsseite her betrachtet, veröffentlicht hat.